



—秋田の名作を尋ねて—

私小説 阿部牧郎 『それぞれの終楽章』

北条 常久

(あきた文学資料館 名誉館長)

阿部牧郎の『それぞれの終楽章』（「小説現代」昭和62年6月号～9月号）は、小説家矢部宏（阿部牧郎）が高校時代の親友森山隆之（税理士）の自殺の報に大阪から駆けつけ、〇駅（大館駅）に下車するところから始まる。

駅の建物はくすんでいた。人影のないベンチや戸をしめた売店やひからびたコンクリートの床面を、蛍光灯が疲れきったあかりで照らしていた。矢部は鼻で空気を吸った。むかし駅にあった石炭と機械油の匂い、魚と野菜の匂いをさがしていた。なにも感じなかった。駅ビルのなかにはスーパーマーケットの売り場のように無味無臭である。過去にあったさまざまな別離や再会、出発や到着のなごりまでがきれいに拭き去られている。

実際、阿部牧郎にとって大館駅は、忘れられない駅であった。彼は終戦の年の春、小学5年生のときに、小学校3年生の弟と一緒に父の実家のある秋田県北部の八幡平へ疎開して来た。その時最初に秋田入りした所が大館駅で、そこから花輪線に乗り換えた。その後、彼は旧制大館中学に進学し大館に下宿し土日には必ず大館駅から実家に帰った。

食糧事情が悪く土日に下宿にいることはできなかった。平日の放課後、阿部は森山の家で毎

日を過していた。森山の家は下駄の間屋でゆたかな家であった。その店との向いに別棟があり、一階は海軍経理学校卒の森山の兄が貸本屋兼古本屋を営み、二階の八畳が森山に与えられていた。そこには兄たちの蓄音機とクラシックのレコードがあった。二人は、放課後、その部屋でレコードを聴き、兄の店から本を借り出し、音楽、文学三昧であった。

矢部は通夜の席にタクシーで急いだ。県で二番目の人口の街の夜が静かすぎた。大きなウナギ屋も旅館もなくなっていた。この街の貧窮ぶりは、税理士の自殺と無縁ではあるまいと彼は思った。通夜に顔を揃えた同級生は文房具店の辻島裕平、書店の市村治夫、料亭の坂井達夫、時計店の芦田昌雄たちで全員商売人である。矢部は自殺の原因を彼等に尋ねた。というのは、無二の親友と思い込んでいた森山から借金の申し入れも窮状を訴える手紙も来ていなかったの

で矢部には森山の自殺の本意が分からなかった。聞けば、税理士の森山は商売人の債務保証をするうちに泥沼に入り、逆に同級生たちから借金する破目に陥り、自殺に追い込まれたようであった。しかし矢部には商売人と言えれば一人足りないことに気づいた。それは〇市で農機具店やドライブインレストランを営んでいた斎藤謙一である。これも森山が四、五千万円の債務

保証をしていたという。斎藤はトラックと正面衝突して交通事故の保険金で斎藤の銀行への借金は返したので、森山の弁済義務は免れた。しかし個人的に斎藤に融通したぶんはまだ残っている。斎藤は瀕死の重傷を負っても生命はとりとめたが、頭を強打して記憶を失っていた。それで森山の葬儀に参列はしていなかったのである。矢部は斎藤にも会いたいと思ったが、誰も矢部を斎藤の所に案内しない。級友たちは斎藤を爆弾みたいに遠巻きにして近寄らなかった。

矢部は同級生の森山に迷惑をかけたくない一心で、斎藤は交通事故を起こしたと考えたかったが、坂井は「それはねえスベ。斎藤はそんな気が弱い男でないもの。森山とは違う。居眠り運転だと思ってらな」という。

矢部は一人で記憶を頼りに斎藤に会いに行き、彼に話しかけた。「森山が死んだぞ。おぼえてないか斎藤。森山隆之だ。あいつが死んだ。わかるか」斎藤は二度うなずいた。

「この人、泣いたのスよ。森山さんが亡くなったと聞いて、涙こぼしたのス」彼の妻が切迫した口調で話した。

「森山を思い出したんですか。もう少しでないですか。一つがはっきりすると芋蔓式に思いだすことかあるそうですよ」矢部は心臓が苦しくなった。

もう一度、身を乗りだして、呼びかけた。「おれがわかるだろう。矢部宏だ。いっしょに十和田湖へいったじゃないか。森山も辻島も坂井もみんなだ。思い出せよ斎藤」奇蹟がおこりそうだ。頭のなかで炭火がはじけている。

「なんして死んだべ。森山は」斎藤はつぶやいた。とほうにくれた表情になって、首をひねった。矢部は彼と握手をかわした。斎藤の掌は肉

が厚く、あたたかだった。「まだきてくれや。矢部さん、またな」目を細くして斎藤はいった。

矢部は、芦田時計店も訪ねていた。芦田は、旧制中学への入試に失敗して、高校は定時制であった。その芦田が、自殺する二日前の夜遅く、森山が彼に七万円借りにきたという。「おれみたいな零細業者サそんな話ばしにくるなんて、よくよくのことであつたべおん」。森山は生命保険の払い込み金を二カ月分とどこおらせていた。あす一番に払い込まないと三千五百万円の生命保険が失効になると芦田に話したそうである。それは愛人と子供のための保険金だった。矢部は、森山に女と子供がいることを知り、彼女とその子を訪ねる。森山は、〇高の同級生には最後のお願いができなかった。まして無二の親友矢部に無心はできなかったのである。

作家矢部は、〇市で数々の人生を見て大阪に帰り、いつもの散歩コースに出てみると対岸のコースを同級生たちがほどよい足どりで歩いて行くのが見えた。

芦田は短い脚をはこんでいる。辻島は大腿で、市村は背すじをのばして歩いている。坂井はやや猫背で、肝臓薬の瓶を持ってあとにつづく。斎藤が道ばたで休んでいる。にこにこして仲間を見送っている。彼らもまもなく森山を追い抜くだろう。

その時阿部は、同級生たちの人生の終楽章を文字にするという責務を背負ったことを強く意識した。それは、昭和42年に作家として独立しながらも不遇な自分を鼓舞する決意でもあった。

『それぞれの終楽章』は、昭和62年に単行本(講談社)として出版され、その年の第98回直木賞を受賞した。